

第5回 パラダイムシフトと日本のシナリオ懇談会 議事概要

1. 開催日時：令和元年6月25日（火）17：00～18：40
2. 場所：中央合同庁舎第8号館8階 特別中会議室
3. 出席者：安宅和人氏、伊藤元重氏、大槻奈那氏、落合陽一氏、須賀千鶴氏、
高田旭人氏、高橋進氏、古市憲寿氏
(内閣府) 茂木大臣、多田政策統括官、田和政策統括官

<目指すべき社会像>

- ・ これまでの議論を整理すると、日本が目指すべき社会像として、誰もが存在意義や役に立てている実感を持てる社会、何かを新たに始めようとした時に軽快にドリームチームが組める社会、テクノロジーを使いこなすことで既存の社会システムを筋肉質に維持し、浮いたリソースを未来に投資できる社会、ルールや枠組みの構築、国際連携を主導して、分断する世界を結びつけるカタリスト社会、目に見えない価値、デザインの提供に熟達している社会、といったようにまとめられるのではないか。
- ・ そうした社会を実現するためには、データ、人材、土地等のアセットを未来のために柔軟に組み替え・最適化する、広く国民がAIやVR（バーチャルリアリティ）を使いこなし、AI・VR-readyな状況を実現する、人生100年時代にあった人材のあるべき像、教育プログラムやスキル刷新の仕組みをつくる、デジタル時代に即した富の再分配能力を獲得する、ことが必要。

<目指すべき経済像に向けた課題>

- ・ 日本の課題はパラダイムが外在的なこと。国際比較する指数や指標でも日本がトップになれるようなものを今から考えて作っていく必要があるのではないか。
- ・ 国際的なルールを作る方が勝ちであり、ルールメーカーとなれるチームを形成する力が重要。
- ・ 霞が関の個別の施策を作る力はグローバルにみても高水準である一方、世の中をどう捉え、政府として何をすべきかというナラティブ、ストーリーを構築するところが弱い。それを埋めていくことが課題であり、この懇談会の意義もそこにある。
- ・ 現在はソフトウェアが世界を刷新し、あらゆる産業が横断的に組み替っている。新しい取組に対する既存業界の反対を乗り越えていかないとイノベーション大国に戻れない。
- ・ 多数が規制を改革したいと考えているにもかかわらず、既存の勢力とともに行政も変えることに対して抵抗が強い。この構図を変えていく必要がある。

<技術革新による経済社会の変化>

- ・ ソフトウェアの限界費用の低下により、コピーが容易でその上に乗っているリソースもとても真似しやすくなっている。このことが、今起きているパラダイムシフトに大きな影響を与えている。
- ・ イノベーションを生み出すためには、「アジャイルソフトウェア開発宣言」にあるような「プロセスやツールよりも個人との対話を」、「計画に従うことよりも変化への対応を」と

いった考え方に価値を置くことで世の中はもっと良くなる。

- ・ これからのデジタル社会は、「AIプラスBI（ベーシックインカム）型」と「AIプラスVC（ベンチャーキャピタル）型」に分化していくのではないか。AIを始めとするテクノロジーで社会が発展する中で、所得や資本の再分配によって生活を保障する社会か、成功すれば高収入だが失敗するリスクも大きいという社会に二極化していくのではないか。
- ・ デジタル時代に所得再分配の原資をいかに確保するかが課題。現状を放置すれば労働への分配が低下し、かつデジタル企業への課税技術が未発達の中では内部留保が積み上がる構造になってしまう。
- ・ 技術革新が大きく進んでいくと、グローバル化に対する反発と似たように、技術革新に反発する動きも出てくるかもしれない。

<人材育成、教育の在り方>

- ・ パラダイムの転換が起きている現代では、これまでの前提を疑い、新しい環境で新しい技術を自ら実装する力を持ち、資金調達力もあってアウトプットできるフットワークの軽い人材を育てていくことが重要。
- ・ 20世紀の大量生産・消費社会ではタイムマネジメントが重要であったが、21世紀はストレスマネジメントが重要な時代。ただし、ストレスに対応する方法は一人ひとり異なるものであり、それぞれの特性に合った早く見つけていくことが重要。
- ・ 子どもの教育、特に小中学校の授業で問題だと思うのは、時間で区切って次々と違う科目を勉強すること。何かに集中して取り組みたいという子どもにとってはストレスが大きいと思う。大学入試のあり方とともに変えていくべき。
- ・ いわゆる引きこもりが社会問題となっているが、若年層では不登校が、中高年層では職場を辞めたことがきっかけになることが多い。社会との接点を持ち続けられるようにしていくことが大切。
- ・ 家族や社会のシステム、所得や貧困などの問題から引きこもりが固定化されないよう子どもを巡る環境を変えていく必要がある。

<地域活性化、スマートシティ>

- ・ 地方には今でも素晴らしいものがたくさんあり、各地域で良いものを作る努力が続けられている。こうした魅力を「伝える」施策を強化してはどうか。
- ・ 地域を盛り上げることにスポーツは有効であり、前例のないものを始めるには民間の力が有効。ただし、民間だけでは難易度が高く、行政が民間活力を積極的に支援していくべき。
- ・ 技術を使って地域の課題を解決することは重要だが、地方ではITは難しいものというイメージが大きく前例がないと動かない。国がスマートシティ構想をアシストすることが必要。

（速報のため事後修正の可能性あり）